

A CLASS OF SECRETARY PROBLEMS ON SEQUENCES OF CONTINUOUS BIVARIATE RANDOM VARIABLES

01200424

坂口 実 SAKAGUCHI Minoru

01503164 神戸商科大学

*濱田年男 HAMADA Toshio

1. はじめに

逐次出現する n 人の候補の中から、1人の秘書を選択する。個々の候補は2つの属性 (X_i, Y_i) を持っている。このとき次の2つの問題

$$(1^\circ) \quad E[X_\tau I(Y_\tau \geq a)] \rightarrow \max_\tau,$$

$$(2^\circ) \quad \text{Pr.} \left\{ X_\tau = \max_{1 \leq t \leq n} X_t \ \& \ Y_\tau \geq a \right\} \rightarrow \max_\tau$$

を考える。ここに $I(e)$ は事象 e の定義関数であり、 $a > 0$ は定数である。本研究は Sakaguchi and Szajowski [4] に続くものである。

2. 条件 $Y \geq a$ の下でのより良い X の選択.

確率変数の対 $\{(X_i, Y_i)\}_{i=1}^n$ に対して $Y_\tau \geq a$ の下で EX_τ を最大にするような τ を求める。もし、 $(n-1)$ 番目までに停止しなければ、 (X_n, Y_n) において停止する。ここで、 V_n は最適停止規則を用いたときの期待利得とすると、

$$V_1 = E[XI(Y \geq a)]$$

$$V_n = E[XI(Y \geq a) \vee V_{n-1}]$$

$$= T_a(V_{n-1}) + V_{n-1}, \quad (n = 2, 3, 4, \dots) \quad (1)$$

ここに s と $a > 0$ に対して、

$$T_a(s) \equiv E\{[XI(Y \geq a) - s]^+\} \quad (2)$$

2.1 2変量一様分布の場合

$[0, 1]^2$ 上の密度関数

$$p(x, y) = 1 + \gamma(1 - 2x)(1 - 2y), \quad |\gamma| \leq 1, \quad (3)$$

をもつ2変量一様分布に対して、

$$q(x) \equiv \int_0^a p(x, y) dy = \bar{a} \{1 - \gamma a(1 - 2x)\}$$

とする。この場合は

$$T_a(s) = (1 - s)^2 \left\{ \frac{1}{2} \bar{a} + \frac{1}{6} \gamma a \bar{a} (1 + 2s) \right\}.$$

したがって

$$V_1 = E[XI(Y \geq a)] = \bar{a} \left(\frac{1}{2} + \frac{1}{6} \gamma a \right)$$

および、 $n = 2, 3, 4, \dots$ に対して

$$V_n = \frac{\bar{a}}{2} (1 - V_{n-1})^2 \left\{ 1 + \frac{\gamma a (1 + 2V_{n-1})}{3} \right\} + V_{n-1} \quad (4)$$

となり、次の定理が成立する。

定理.1 2変量一様分布 (3) に対する問題 (1 $^\circ$) の最適停止規則は「もし $X \geq V_{n-1}$ かつ $Y \geq a$ ならば停止する。さもなければ継続する。」である。ここに $\{V_n\}$ は再帰式 (4) により決定される。 n 候補の場合の最適期待利得は V_n である。

2.2 2変量正規分布の場合

$(-\infty, \infty)^2$ 上で密度関数

$$p(x, y) = \phi(x) \frac{1}{\sqrt{1 - \rho^2}} \phi\left(\frac{y - \rho x}{\sqrt{1 - \rho^2}}\right) \quad (5)$$

をもつ2変量正規分布を考える。ここに $\phi(x) \equiv (2\pi)^{-1/2} e^{-(1/2)x^2}$ である。 $\Phi(a) \equiv \int_{-\infty}^a \phi(y) dy$,

$$\int_s^\infty (x - s)\phi(x) dx = \phi(s) - s\bar{\Phi}(s) \equiv \Psi(s), \quad (6)$$

とすると

$$T_a(s) = \sqrt{1 - \rho^2} \int_a^\infty \phi(y) \Psi\left(\frac{s - \rho y}{\sqrt{1 - \rho^2}}\right) dy + (-s)^+ \Phi(a). \quad (7)$$

ここに、 $\Psi(s)$ については DeGroot [1; Section 13.4 ~ 13.6], または Sakaguchi [3] を参照。

(7) と (2) より、 $\{V_n\}$ は $V_1 = \rho\phi(a)$ より始まる増加列である。

定理.2 (5) で表される2変量正規分布に対する最適停止規則は「もし $X \geq V_{n-1}$ かつ $Y \geq a$ ならば停止する。さもなければ、継続する。」ここに $\{V_n\}$ は再帰式

$$V_n = \sqrt{1 - \rho^2} \int_a^\infty \phi(y) \Psi\left(\frac{V_{n-1} - \rho y}{\sqrt{1 - \rho^2}}\right) dy + (-V_{n-1})^+ \Phi(a) + V_{n-1} \quad (8)$$

によって決定される。 n 候補の場合の最適期待利得は V_n である。もし $\rho = 0$ のとき、(8) は

$$V_n = \bar{\Phi}(a) \{\Psi(V_{n-1}) + V_{n-1}\} + \Phi(a) V_{n-1}^+ \quad (9)$$

3. 条件 $Y \geq a$ の下での最良の X の選択

問題(2°)の解 τ を求める。ここで、状態 $(x|n, i)$ は $X_i = \max(X_1, X_2, \dots, X_i) = x$ かつ $Y_i \geq a$ を表すものとする。また、 $v_{n,i}(x)$ は状態 $(x|n, i)$ のときに最適規則を用いたときの n 候補問題の期待利得とする。

3.1 密度関数(3)の2変量一様分布

この場合の最適方程式は

$$v_{n,i}(x) = \max \left[x^{n-i}, \sum_{j=i+1}^n x^{j-i-1} \int_x^1 q(z) v_{n,j}(z) dz \right] \quad (10)$$

$$(i = 1, 2, \dots, n; 0 \leq x \leq 1; v_{n,n}(x) \equiv 1)$$

となり (Ross [2]; pp.137-139), OLA 停止領域 B は

$$B \equiv \left\{ (x|n, i) \left| x^{n-i} \geq \sum_{j=i+1}^n x^{j-i-1} \int_x^1 q(z) z^{n-j} dz \right. \right\} \\ = \left\{ (x|j) \left| 1/\bar{a} \geq K_j(x) \right. \right\}, \quad (11)$$

ここに

$$K_j(x) = (1-\gamma a) \sum_{m=1}^j \frac{x^{-m} - 1}{m} + 2\gamma a x \sum_{m=2}^{j+1} \frac{x^{-m} - 1}{m}.$$

補題.1 $|\gamma| \leq 1$ に対して (11) により与えられる領域 B は閉じている。すなわち、一度 B に入ったら、状態は B から外へ出ない。

定理3. 最適方程式 (10) に対する最適停止規則は、 $Y_i \geq a$ かつ $X_i = \max_{1 \leq t \leq i} X_t > d_{n-i}$ を満足する最初の (X_i, Y_i) において停止することである。ここに d_j ($j = 1, 2, 3, \dots$) は方程式 $K_j(x) = (\bar{a})^{-1}$ の区間 $[0, 1]$ 内の唯一の根である。

例1. $n = 5, \gamma = 0.5, a = 0.6$ に対する最適停止規則は: 「もし $Y_1 \geq 0.6$ & $X_1 \geq 0.728$ ならば終了。さもなければ、 (X_2, Y_2) を観察。その結果もし $Y_2 \geq 0.6$ & $X_2 \geq X_1 \vee 0.651$ ならば終了。さもなければ、 (X_3, Y_3) を観察。その結果もし $Y_3 \geq 0.6$ & $X_3 \geq X_1 \vee X_2 \vee 0.531$ ならば終了。さもなければ (X_4, Y_4) を観察。その結果もし $Y_4 \geq 0.6$ & $X_4 \geq X_1 \vee X_2 \vee X_3 \vee 0.304$ ならば終了。さもなければ (X_5, Y_5) を観察して終了。」

3.2 密度関数(5)の2変量正規分布

この場合には $\int_a^\infty p(z, y) dy = \phi(z) \bar{\Phi} \left(\frac{a-\rho z}{\sqrt{1-\rho^2}} \right)$ より

$$v_{n,i}(x) = \max \left[(\Phi(x))^{n-i}, v_{n,i}^c(x) \right], \quad (12)$$

$$(i = 1, 2, \dots, n; -\infty \leq x \leq \infty; v_{n,n}(x) \equiv 1)$$

ここに

$$v_{n,i}^c(x) = \sum_{j=i+1}^n \int_x^\infty \frac{\phi(z) \bar{\Phi} \left(\frac{a-\rho z}{\sqrt{1-\rho^2}} \right)}{(\Phi(x))^{-j+i+1}} v_{n,j}(z) dz$$

であり、OLA 停止領域 B

$$\left\{ (x|j) \left| 1 \geq \sum_{m=1}^j \int_x^\infty \frac{\bar{\Phi} \left(\frac{a-\rho z}{\sqrt{1-\rho^2}} \right) \phi(z) (\Phi(z))^{m-1}}{(\Phi(x))^m} dz \right. \right\}$$

が最適となり、任意の $|\rho| \leq 1$ に対して、 $a \downarrow -\infty$ ならば、

$$B = \left\{ (x|j) \left| 1 \geq \sum_{m=1}^j m^{-1} [(\Phi(x))^{-m} - 1] \right. \right\}, \quad (13)$$

このことは $X \sim N(0, 1)$ ならば $\Phi(X) \sim U_{[0,1]}$ となることより明らかである。

定理4. 2変量正規分布(5)に対する最適方程式(12)に対する最適停止規則は、 $Y_i \geq a$ かつ $X_i = \max_{1 \leq t \leq i} X_t > f_{n-i}$ を満たす最初の (X_i, Y_i) で停止することである。ここに f_j は次の方程式の $(-\infty, \infty)$ における唯一の根である。

$$\sum_{m=1}^j \int_x^\infty \bar{\Phi} \left(\frac{a-\rho z}{\sqrt{1-\rho^2}} \right) \frac{\phi(z) (\Phi(z))^{m-1}}{(\Phi(x))^m} dz = 1. \quad (14)$$

$\rho = 0$ のとき、

$$\sum_{m=1}^j m^{-1} [(\Phi(x))^{-m} - 1] = \left(\bar{\Phi}(a) \right)^{-1}. \quad (15)$$

例2. $n = 5, \rho = 0, a = 0.84$ のときの最適停止規則は、例1において $0.6, 0.728, 0.651, 0.531, 0.304$ をそれぞれ $0.84, 0.206, -0.014, -0.345, -0.966$ で置き換えることにより得られる。

参考文献

- [1] M. H. DeGroot, *Optimal Statistical Decisions*, McGraw-Hill, New York (1970).
- [2] S. M. Ross, *Applied Probability Models with Optimization Applications*, Holden Day, San Francisco, CA (1970).
- [3] M. Sakaguchi, Effect of correlation in a simple deception game, *Math. Japonica*, **35** (1990) 527-536.
- [4] M. Sakaguchi and K. Szajowski, Mixed-type secretary problems on sequences of bivariate random variables, to appear.